

## 巻頭言

# 留学生30万人時代に向かって

石 田 幸 男

昨年の4月に留学生センター長に就任してから1年が過ぎた。センターの春夏秋冬の1サイクルを経験し、ようやく留学生、あるいは留学生センターを取り巻く状況が分かってきた。私の専門に関わる工学研究科のある北部地区から、国際ゾーンと呼ばれるセンターのある南部地区に来ると、名古屋大学で現在1200名もの留学生が学んでいるという実感がわいてくる。世界各国からきた多くの若い留学生が、希望に燃えてこの名古屋大学で学んでいる姿をみるのは楽しみである。センターの研修コースの修了式で、「この名古屋大学で学ぶことができ幸せだった。」という上手な日本語の挨拶を聞いていると、センターの先生方の献身的な努力を感じるとともに、彼らの期待に反することがないようにさらに努力しなければならないと身が引き締まる思いがする。

さて、センターのこの一年の主なできごととしてまず挙げることは、昨年12月に行われた外部評価である。前回の外部評価は平成14年に行われたが、今回は平成15～19年のセンターの活動を、特に「教育の国際交流拠点としての留学生センター」という切り口で評価していただいた。教育活動、国際あるいは地域との教育交流、教育支援活動、研究活動、社会活動、管理運営と様々な観点からセンターの活動を紹介し、外部評価委員の先生方から意見をいただいた。全体としてよい評価をいただいたが、多くの留学生を抱え、世界大学ランキングの上位にある大学にふさわしい研究環境の整備が必要であるというご指摘もいただいた。国立大学の法人化以降、定員削減や非常勤講師費用の削減が行われ、ますます厳しい環境となってきたが、知恵と努力でそれを克服し、全学的にも一目置かれる存在にならねばならない。

留学生10万人計画を達成したあとのこの4年間、留学生の数が横ばい状態にあり、やや一服の感があった。しかし、昨年からは始まった中国政府の高水準留学生派

遣事業、福田首相の施政方針演説で出された留学生30万人計画、それに伴う国際化拠点大学30の選出の動き、また就職を見据えた支援であるアジア人材資金構想など、これから留学生が急増する様々な施策が始まっている。30万人という数の根拠はともかく、自然増ではない急増は様々な問題を生む危険がある。留学生の増強を考えると、小子化による大学の入学者減への対処、労働人口不足への対処といった観点ではなく、本当に優秀な留学生を受け入れ、日本の大学生とともに切磋琢磨しながら日本の学問の水準を上げ、科学技術を発展させるという視点が不可欠である。

優秀な留学生を得るために最も大切なものは、日本の高等教育の質の問題である。日本の大学を卒業すれば、確実に高度な実力が付くという評価が世界に広まってこそ、優秀な学生が集まる。アメリカが常に世界のトップを走っているのは、本当のアメリカ人とは？と聞かれるほど、他国からの多くの人材が集まり、各分野で活躍しているからである。そして、このように多くの優秀な留学生をアメリカに集めることができるのは、大学生活が楽しいからではなく、大学の講義の質、成績評価の厳しさと客観性、高度な研究水準を信頼できるからであろう。

これから大量の留学生を受け入れる時代になると、受験時代に猛烈に勉強し、大学で青春を楽しみ、その後、企業戦士となる日本流のシステムは通用しなくなる。留学生の選抜方法、活発な質疑応答の講義、客観的で厳しい成績評価、大学院における優れた研究など世界基準からみて通用する大学になるため、なすべきことはたくさんある。このような教育システム構築にあたり、常日頃留学生に接し、また海外事情に詳しい留学生センターの教員に対する期待は非常に大きい。

最後に、本紀要はセンターの1年の活動をまとめたものである。皆様のお役に立てたら幸いである。